第十二講　認識論・哲学論（後編）

ロビンソン・クルーソーが味わっていた孤独感とはいったいどのようなものだろうか。彼が耳にする風の音や波の音を聞くものは、彼の他(ほか)には誰もいない。彼の目に映るものを共に見てくれるものも誰もいない。彼が苦しもうと悲しもうと誰も知らない。彼は世界から取り残され、たった一人ぼっちなのである。彼はそれゆえに苦しむのである。トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠は、はたしてロビンソンのように孤独感で苦しんだりするだろうか。孤独であることを意識しそれを味わえるのは、人間の高度な能力の一つであるように思われる。

私たちは仲間と生活し交流し合っていれば孤独感を抱かないと言うわけではない。私たちがロビンソン・クルーソーの物語に心をひかれるのは、私たちがある意味でロビンソン・クルーソーに他ならないからである。私たちは、少なくとも大人である私たちは、いつからか孤独であることを知っている。C私たちはいわば〝私〟という孤島に住むロビンソン・クルーソーなのである。私たちの味わう孤独は次のような諸命題で定義できる。「私の今知覚している世界は、本質的に他の誰にも知覚できない世界である」・「私の今感じている感覚を感じることのできる者は誰もいない」・「私の抱いている気持ちを他者が理解することは不可能である」・「私のことばの本当の意味を理解するものは誰もいない」などである。これは簡単に言うと、自己は唯一無二の存在であり、他者と自己とは本質的に異なった存在であるという意識である。このような意識を〝私（わたくし）〟意識と呼ぶことができるDだろう。〝私（わたくし）的なもの〟とは決して他者と分かち合うことのできないようなもの、すなわちもっぱら〝私〟だけに属するものである。トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠などの生物が、孤独を味わうことができなかったのは、別な言い方をすれば、彼らには〝私的な〟世界つまり〝私〟だけの世界というものが成立していなかったためとも考えられるように思われる。

以上に述べたことと、それまでに述べてきたこととが一見すると矛盾しているように感じられるかも知れない。だが、〝私的な〟世界をもちうることと、〝自己〟と〝他者〟とを基本的に同型的なものとして認識し〝共同化された知覚世界〟をもつこととは、E決して矛盾しているわけではない。後者があってこそ、前者が成立しうるのである。

差異の概念は、常に同一性や類似性の概念を前提にしている。私たちは、まったく異なるものを比較することができない。たとえば、形容詞とプリンとを比較することは困難である。しかし、納豆とプリンとを比較するのは容易である。なぜならば、両者は物体でありしかも加工品であり食物であるなど多くの同一性・類似性をもっているからである。自己と他者とが互いに似た存在であることを知らず、自己と他者とが共通世界を分かち合っていることを知らない、トンボやカブト虫や金魚や鳩や鼠などには、自己と他者との断絶を理解することはできない。〝自己〟と〝他者〟とを似た同型的な存在として組織化し、その両者に平等に開示された〝共同化された世界〟をもつことのできたものにだけ、その〝共同的な世界〟から疎外されたという意識が発生しうるのである。

（麻生武『身ぶりからことばへ　赤ちゃんにみる私たちの起源』）

問４　傍線部Ｃ「私たちはいわば〝私〟という孤島に住むロビンソン・クルーソーなのである」とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　〝自己〟と〝他者〟の本質的相違を意識することにより、〝自己〟の内部世界を共有する〝他者〟を見いだせずにいるということ。

②　〝自己〟と〝他者〟の相違を絶対的なものと認識するがゆえに、〝自己〟の内面に対する〝他者〟の理解を拒絶してしまうということ。

③　〝自己〟の内面を〝他者〟に知られてしまうことへの抵抗感から、〝他者〟による理解を望みながらも得られずにいるということ。

④　〝自己〟と〝他者〟の本質的な相違を克服するために、〝自己〟の内部に理解者となる架空の〝他者〟を探し求めてしまうということ。

⑤　〝自己〟と〝他者〟との共同化された知覚世界を認識しながらも、これを一種の仮想的な関係として意識してしまうということ。

問５　傍線部Ｄの「だろう」の用法の説明として最も適当なものを、次から選べ。

①　筆者の考えを断定的になりすぎないようにやわらげている。
②　筆者の意見を読者に強く訴えかけ確認を促している。
③　ある条件の下で起こりうる可能性を示している。
④　未来に起こることがらを推量として表している。
⑤　特に強調したい部分を文脈から浮き立たせている。

問６　傍線部Ｅ「決して矛盾しているわけではない」とあるが、なぜそう言えるのか。その理由として最も適当なものを、次から一つ選べ。

①　〝自己〟が〝他者〟から切り離されているという孤独感から生じる〝私的な〟世界は、〝共同化された知覚世界〟を挟んで〝自己〟が〝他者〟を意識することとは無関係に成立するから。
②　〝自己〟を唯一無二の存在と意識する〝私的な〟世界は、〝自己〟と〝他者〟とに平等に開示されている〝共同化された知覚世界〟の一部として成立するから。
③　〝自己〟と〝他者〟との本質的な違いが生み出す〝私的な〟世界は、〝共同化された知覚世界〟を構成する〝自己〟と〝他者〟とが相補的な存在であるとの自覚から成立するから。
④　〝自己〟を中心とする〝私的な〟世界は、〝共同化された知覚世界〟を軸にシンメトリーな関係として構造化されている〝他者〟の世界の対極として成立するから。
⑤　〝自己〟と〝他者〟との断絶の意識に基づく〝私的な〟世界は、〝自己〟と〝他者〟との同型性を認識し〝共同化された知覚世界〟を分かち合うことができてはじめて成立するから。

第十二講　知識モノ解説

語句

命題＝めいだい→言語的な表明・言明・テーゼ・プロポジション

唯一＝ゆいいつ→・ただ一つ・二つとない

無二＝むに→二つとない・比類ない

矛盾＝むじゅん→つじつまがあわない・論理が首尾一貫していない・撞着（どうちゃく）・パラドックス・二律背反・双方の意見が同時には成り立たない

相補的＝そうほてき→お互いに足りないところを補い合う

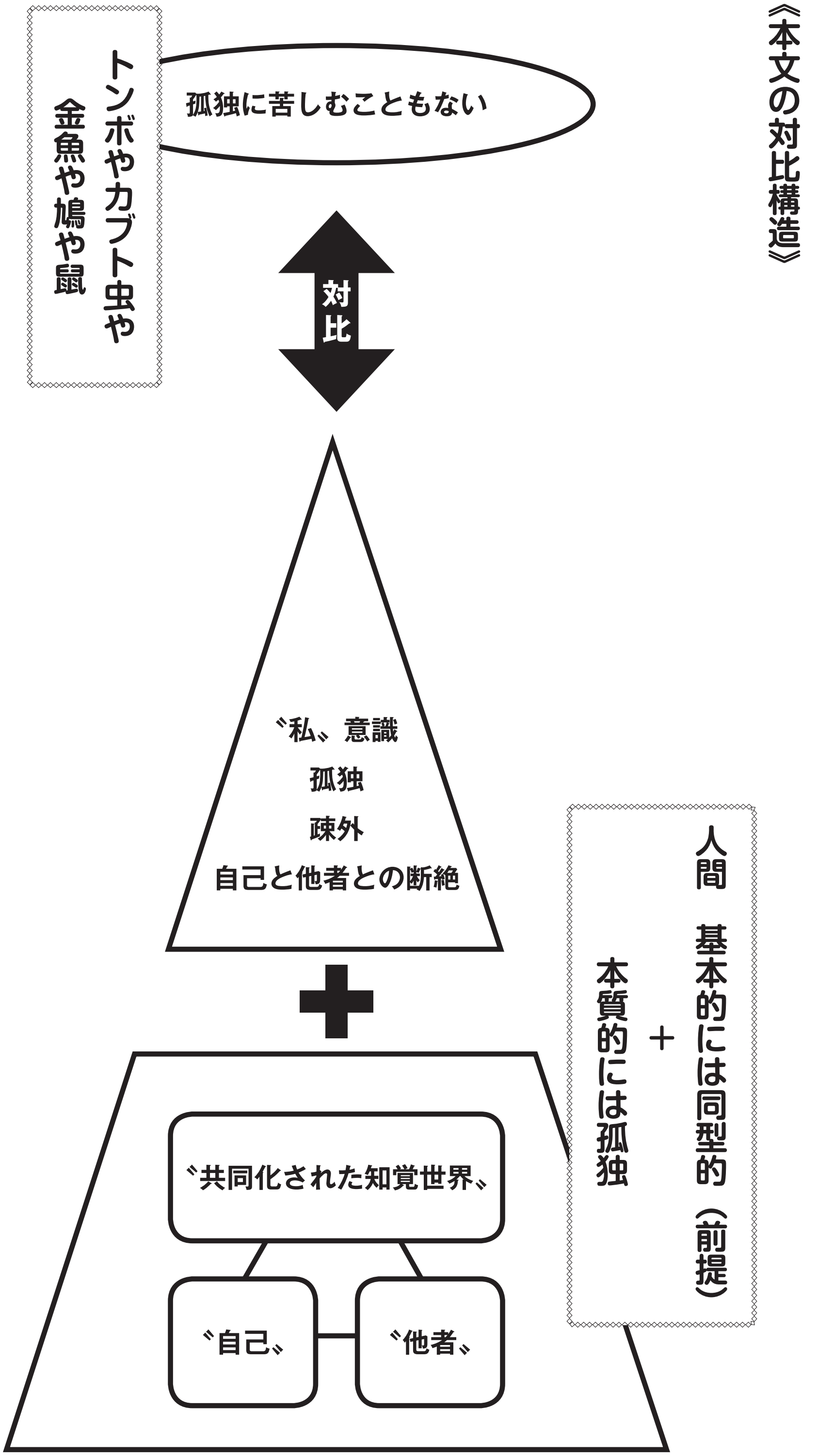
復習問題　第十二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）研究成果をメイ題として表現する　①銘　②明　③名　④迷　⑤命
（イ）両者の意見は矛ジュンして両立しない　①純　②準　③盾　④順　⑤巡
（ウ）両国の平和条約がセイ立する　①制　②成　③生　④姓　⑤聖
（エ）日米の文化間の差イを研究する　①易　②治　③違　④異　⑤夷
（オ）外来文化との類ジ性を探る　①字　②次　③磁　④自　⑤似
（カ）動物と人間を比カク研究する　①覚　②閣　③較　④郭　⑤嚇
（キ）ヨウ易には分かりえない人間の心理　①要　②様　③容　④用　⑤揚
（ク）商店の棚にカ工品が並んでいる　①化　②加　③過　④火　⑤科
（ケ）世代間に大きなダン絶がある　①断　②段　③弾　④団　⑤談
（コ）調査の結果を市民にカイ示する　①回　②誠　③会　④開　⑤解

第十二講　認識論・哲学論（後編）

《本文の対比構造》



《解説》

問４《傍線部説明・選択肢》

第十一講で見た通り、私たち人間は、お互いに全く同一ではないけれども、ほぼ「同型的」で基本的にはわかり合える存在です。あるいは、互いに理解可能な存在同士として自分や他者を考えています。でもとことん突き詰めれば、私とあなたは違う。私が考えていることについて「本質的に他の誰にも知覚できない」「他者が理解することは不可能」ということです。また「他者と自己とは本質的に異なった存在であるという意識」もあります。究極的には、自分は「孤独」だということで、筆者はさらにこれを「〝私（わたくし）〟意識」と呼んでいます。傍線部の「〝私〟という孤島に住むロビンソン・クルーソー」は、このことを指しています。したがって、①が正解です。②の「〝他者〟の理解を拒絶してしまう」や③の「〝他者〟に知られてしまうことへの抵抗感」が同種の×です。「拒否」や「抵抗」ではなく、自己と他者はその「本質」において異なるということですから、記述に反する誤りです。④は「〝自己〟と〝他者〟の本質的な相違を克服するために」が×。克服できません。記述に反する誤りです。さらに「〝自己〟の内部に理解者となる架空の〝他者〟を探し求めてしまう」も×。これは前半（第十一講）の話で、〈おおむねわかり合える〉の内容です。犬とは「船のマスト」について共通了解が成り立たなくても、いざとなれば内面のもう一人の自分を〝他者〟に見立てて、自分で納得することができるという話です。つまり〈大体わかり合えるという話〉を〈突き詰めればわかり合えないという話〉をしている問４に混ぜてしまった。これは対比混乱の誤りです。⑤は「仮想的」が×です。事実です。「〝自己〟と〝他者〟との共同化された知覚世界」を「仮想的」としていますが、それはヴァーチャルでもフィクションでもなく事実です。記述に反する誤りです。

問５《傍線部説明・選択肢》

「このような意識を〝私（わたくし）〟意識と呼ぶことができるだろう」という部分ですが、これは人間の「孤独」を様々に表現できるうち、あるオプションを、つまりこんな表現もあるよ、と提案しているのです。実際に、傍線前後で「簡単に言うと〜」「別な言い方をすれば〜とも考えられるように思われる」とあります。特にこの「〜とも考えられるように思われる」という遠慮がちな表現が根拠になります。したがって「筆者の考えを断定的になりすぎないようにやわらげている」の①が正解です。

問６《傍線部説明・選択肢》

問４で見たような「孤独」の話は、一見、第十一講の部分で述べられていた「〝自己〟と〝他者〟とを基本的に同型的なものとして認識し〝共同化された知覚世界〟をもつこと」と矛盾するようだが、そうではない、ということです。基本的には人間同士はわかり合えるはずという思いが〈大前提〉にあるからこそ、すれ違いのたびに「孤独」を感じることができるのです。〈おおむねわかり合える〉を[ア]、〈究極、本質的には孤独〉を[イ]とすれば、[ア]をベースに[イ]がその上に乗っかっている構図を描けます。人間はそういう二重性をもつ高度な生き物なのですね。したがって、[イ]は[ア]があって「はじめて成立する」という表現になっている⑤が正解です。①は、[イ]は[ア]と「無関係に成立する」という書き方ですから×。記述に反する誤りです。関係ありありです。②は、[イ]は[ア]の「一部として成立する」は×です。[ア]によってのみこまれてしまいました。はい、記述に反する誤りです。④は、[イ]は[ア]の「対極として成立する」という書き方になっていて×です。記述に反する誤りです。むしろ人間と動物が「対極」なのです。③はどうでしょうか。[イ]は[ア]から「成立」という言い方はＯＫです。しかし、[ア]に当たる説明がマズいです。「〝共同化された知覚世界〟を構成する〝自己〟と〝他者〟とが相補的な存在」としていますが、「相補的」は、十一講の問１の③の「補完的」と同じ間違いです。つまり本文の「依存」を消しゴムの貸し借り関係にとらえた間違い、つまり文脈喪失の誤りです。

模範解答

問４＝①　問５＝①　問６＝⑤

こうして、第十一講と第十二講に分けて本来一つのセンター試験の問題を扱いました。センター現代文は、時として難しく「スタンダードレベル」と言えないものも、分けて冷静に挑んでいけば、こなせます。つまり、難解に見える文章も、対比の積みかさねにすぎないとわかれば、対応可能なのです。

復習問題　解答　第十二講

（ア）⑤　（イ）③　（ウ）②　（エ）④　（オ）⑤
（カ）③　（キ）③　（ク）②　（ケ）①　（コ）④

解答漢字一覧

（ア）命題　（イ）矛盾　（ウ）成立　（エ）差異　（オ）類似性
（カ）比較　（キ）容易　（ク）加工品　（ケ）断絶　（コ）開示